

小児科学講座

教授：井田 博幸	先天代謝異常
教授：大橋 十也	先天代謝異常 (DNA医学研究所に外向)
准教授：宮田 市郎	小児内分泌学
准教授：勝沼 俊雄	小児アレルギー学
准教授：和田 靖之	小児感染免疫学
准教授：加藤 陽子	小児血液腫瘍学 (輸血部に外向)
准教授：浦島 充佳	臨床疫学 (臨床研究開発室に外向)
准教授：小林 博司	先天代謝異常 (DNA医学研究所に外向)
准教授：斉藤 和恵	小児臨床心理学
講師：藤原 優子	小児循環器病学
講師：斎藤 義弘	小児感染免疫学
講師：田知本 寛	小児アレルギー学
講師：秋山 政晴	小児血液腫瘍学
講師：小林 正久	先天代謝異常, 新生児学
講師：浦島 崇	小児循環器病学
准教授：金子 崇	小児血液腫瘍学 (東京都立小児総合医療センター)
准教授：奥山真紀子	小児精神医学 (国立成育医療センター)
准教授：小川 潔	小児循環器病学 (埼玉県立小児医療センター)
准教授：浜野晋一郎	小児神経学 (埼玉県立小児医療センター)
講師：宿谷 明紀	小児腎臓病学 (国立病院機構相模原病院)
講師：清水 正樹	新生児学 (埼玉県立小児医療センター)

教育・研究概要

I. 代謝研究班

代謝研究班の研究対象は例年どおり先天代謝異常症, 内分泌疾患, 奇形症候群である。先天代謝異常症の研究は①ポンペ病でのオートファジー亢進のメカニズムならびにインスリンでそれが制御出来ること②プロテアソーム阻害剤はライソゾーム病の治療に有効であること③ファブリー病酵素補充療法で発生する抗体の治療効果阻害効果のメカニズム④ムコ多糖症, クラッペ病への遺伝子治療の有効性, 以上を明らかにした。内分泌疾患に関しては外科的に左心不全ラットを作成し, それらラットの脳内での Urocortin 2, 3, Nesfatin 1 およびその受容体の発現動態を明らかにするとともに, 炎症性サイトカインとのクロストークについても検討を行った。臨床研究では「ロタウイルス感染により生じたインスリン分泌不全の臨床的検討」や「MCT8 異常症にお

ける *SLC16A2* 遺伝子変異と臨床像との関連性」などを行った。奇形症候群ではアレイ CGH による多発奇形・発達遅滞症例の病因解析を進めている。500 例の解析を行い, 12% で変異を検出した。

II. 神経研究班

神経研究班の 2011 年度における教育・研究概要は以下の通りである。

1. 16 歳未満の脳外傷後遺症 142 例を対象に外傷後てんかんの分析を行った。てんかん発症は 37 例 (26%), 81% が受傷後 2 年未満に発症し, 発作型は部分発作が多かった。非てんかん群とてんかん群を比較すると, てんかん発症率は①虐待>交通事故, ②急性硬膜下血腫>びまん性軸索損傷で, その他のリスク因子は③急性期の重度意識障害, ④移動能力なし, ⑤重度知的障害であることが明らかとなった。

2. 小児けいれん重積に対する治療薬の有効性を評価した。189 機会のうち, てんかんが 42.3%, 熱性けいれんが 41.3% であった。第 1 選択はジアゼパム, 第 2 選択はミダゾラム静注, フェノバルビタールが多く使用され, フェノバルビタール, ジアゼパムで 70% 以上の有効性を認めた。副作用はチオペンタールが最多であった。第 1 選択薬はジアゼパム, 第 2 および第 3 選択薬はフェノバルビタール, ミダゾラム静注が適当と考えられた。

III. アレルギー研究班

アレルギー研究班の主な研究対象は, (1)基礎分野 (マスト細胞, 好酸球), (2)喘息, (3)食物アレルギー, (4)アトピー性皮膚炎, (5)アレルギー治療である。喘息, 食物アレルギー治療に関して我々はここ数年, いくつかの大規模臨床研究を行っている。以下に列挙する。①PET study (Preventive effect of tulobuterol patch for the long-term management of infantile asthma study), ②PARG study (Pediatric Asthma Research for Guideline Update: Add-on use of tulobuterol patch on unstable asthma treated with leukotriene receptor antagonist), ③CIT study (A comparison of continuous inhalation treatment with salbutamol and isoproterenol for severe pediatric bronchial asthma: A multi-center, double-blind, randomized study), ④OS-CAR study (Optimal stepdown therapy for controlled pediatric asthma responded to SFC), ⑤ORIMA study (Effect of oral immunotherapy in preschool children with milk allergy) 等である。

この内、①、②については英文誌に受理された。アトピー性皮膚炎に関しては、アトピー性皮膚炎乳幼児を持つ家族（養育者）のQOL研究を皮膚科との共同研究で行い、調査用紙を完成させたが（Kondo-Endo K, Ohashi Y, Nakagawa H, Katsunuma T, Ohya Y, Kamibeppu K, Masuko I. Development and validation of a questionnaire measuring quality of life in primary caregivers of children with atopic dermatitis (QPCAD). Br J Dermatol 2009; Apr 29.), さらにその short version を開発し投稿中である。

IV. 血液腫瘍研究班

血液腫瘍研究班では、医学部5年生に大学病院における小児緩和医療をテーマに small group teaching を行った。さらに成人緩和ケアチームと小児科が連携し、小児がん患者に対応した緩和医療を提供する体制を確立した。一方、当科は国立がん研究センター中央病院眼腫瘍科と共同で網膜芽細胞腫における眼球温存治療を行っている。また、治療後の遠隔転移や二次がん発症の早期診断における尿ポリアミン測定の有用性を検討している。

基礎的研究の概要を以下に述べる。腫瘍細胞においてテロメラーゼは、盛んな細胞分裂に伴うテロメア短縮やテロメア損傷を修復する重要な酵素である。テロメラーゼ活性化メカニズムを明らかにすることは、腫瘍細胞の薬剤耐性克服につながる。JAS-REN-A 細胞を用いて、エリスロポエチン (Epo) によるテロメラーゼ活性化経路には、Epo 受容体-JAK2/STAT5-AKT による hTERT タンパクのリン酸化が重要な役割を果たしていることを明らかにした。

V. 感染免疫研究班

感染免疫研究班では、PCR法を用いた病原微生物の同定ならびに遺伝子解析、原発性免疫不全症の遺伝子診断ならびに遺伝子治療、膠原病の疾患活動性や予後の評価などを研究テーマとしている。詳細を以下に示す。

1. PCR法を用いた病原微生物の同定ならびに遺伝子解析

小児熱性疾患の multiplex-PCR法を用いた病原微生物の遺伝子診断を行っている。また real-time PCRを用いてヘルペス属のウイルス定量を行い、病態に適した治療法の選択に役立っている。その他、呼吸器ウイルス感染症の分子疫学解析も行っている。

2. 原発性免疫不全症の遺伝子診断と遺伝子治療
慢性肉芽腫症に対する *ex vivo* 遺伝子治療の準備を進めている。

3. 膠原病の疾患活動性や予後の評価

小児リウマチ性疾患の疾患活動性や予後の評価、難治例に対する生物学的製剤による治療効果や安全性について臨床研究を行っている。

VI. 循環器研究班

循環器班では、臨床・基礎研究の双方より小児循環器の病態解析を行い、日本小児科学会、日本小児循環器学会、Pediatric Academy Society, American Heart Association を中心に研究報告を行っている。基礎研究では科研費を獲得し、右心不全モデルラットを使用した右心不全の病態解析から telmisartan が不全右心において抗線維化作用から心機能を維持することを明らかにし、さらにアポトーシスと右心不全の関連性についての検討を行っている。また、肺高血圧、血管新生モデルラットを作成しその病態解明を行っている。臨床研究では先天性代謝疾患に合併する心病変の酵素補充療法による治療効果を検討し、Fabry病では早期の治療開始によって大動脈弁輪拡大、心筋肥大の抑制効果が得られる可能性を明らかにした。ムコ多糖症II型では心筋肥大の進行を防ぐために酵素補充の早期開始が重要であることが明らかになった。近年、先天性心疾患は胎児診断されるケースが多く、形態的のみならず、QT延長症候群などの診断も行っている。

VII. 腎臓研究班

腎臓研究班では、小児領域での血液浄化療法、無症候性蛋白尿の臨床的検討、乳児尿路感染症の現状など臨床に役立つテーマをもち研究を進めている。さらに山田は腎臓内科横尾先生のもとで「腎不全モデルラット用いた間葉系幹細胞の分化能の検討」という基礎的な研究をし、現在英文での論文作成中である。その他レアなケースの症例報告を全国さらには国際レベルの学会で発表している。若い班員が多く、研究期間も短い乳児尿路感染症については原著論文となり、その成果は徐々に実を結び始めている。また国際学会での発表に関しては英文論文化すべく頑張っている。

「点検・評価」

当講座の大きな特色は小児科学のほぼ全ての領域を網羅する専門性を兼ね備えている点と言える。当講座の研究班は代謝班（先天代謝異常グループを中

心に内分泌グループ, 奇形症候群グループより成る), 神経班, アレルギー班, 血液腫瘍班, 感染免疫班, 循環器班, 腎臓班, 新生児班, 精神班の9つの班で構成されており, 日常の診療業務や学生教育にあたるだけでなく, 日々臨床研究や基礎研究も行っている。本年度の評価として, 研究面では各研究班とも昨年度よりも学会発表や論文発表がさらに増加し, 業績は着実に上がっていると考えられる。また教育面でも, レジデント教育・研修医教育・学生教育に対してそれぞれに適したシステムが構築され, 内容的には充実してきていると思われる。そして, 各医局員が研究班の垣根を越えて教育に精力的にあたってくれる点は十分な評価に値する。このたゆまない努力が最終的に小児科全体のレベルアップに繋がっていくことは間違いない。

ここで各研究班の点検・評価に目を向けてみたい。まず代謝研究班は本年度も多くの学会発表や英語論文発表を行った。多彩なサブグループで構成される当研究班には毎年若い班員が入ってきており, 大所帯になりつつある。科研費も多く獲得でき, 様々な分野での研究が進行中であり, さらなる躍進が期待される。神経研究班は主に外傷性てんかんの分析や小児けいれん重積に対する治療薬の有効性などの臨床研究を行っている。本年度も数多くの英文・和文での原著論文を発表しており, その業績の継続性は高く評価される。

アレルギー研究班は, 喘息や食物アレルギーの治療に関して複数の大規模臨床研究を全国レベルで行っている。それらの結果がいくつかの英文誌に受理されており, 業績面では申し分ないと考えられる。これからは若手の指導・育成が重要課題と言えよう。血液腫瘍研究班は高いモチベーションを維持しつつ, 日々の臨床に励みながら研究にも取り組んでいる。若い医師に対する専門教育はしっかり行われている。今年度も例年通りに英文・和文での論文発表がなされており, 高い評価に値する。感染免疫研究班では先端研究として先天性免疫不全に対する遺伝子治療の研究が行われている。また, PCR法を用いた病原微生物の同定や小児リウマチ性疾患の活動性や予後の評価といった小児科臨床に即した研究も進んでいる。今後は, 研究成果としての原著論文の増加が望まれる。循環器研究班は臨床的貢献度が高く, 若手医師に対する専門教育も充実している。右心不全ラットを用いた基礎的研究も進んでおり, 本年度は学会発表も数多く行われた。ただ, 学会発表の論文文化がいま一歩であり, 今後の課題と言える。腎臓研究班は毎年若手班員が増えており, 活気を帯びてき

ている。本年度は国際学会での発表も行われた。原著論文も少しずつ出て来ており, その成果は着実に実を結び始めている。さらなる発展が期待される。

総括すると, 本年度は昨年度よりもさらに業績が増加しており, 講座としては基礎固めの時期から飛躍への移行期にさしかかっていると考えられる。今後は, より Impact Factor の高い英文雑誌への掲載を目指して業績を積み上げていくとともに, 教育面でも内容を一層充実させながら, 小児科学講座全体を活性化させていくことが重要である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Ohashi T, Iizuka S, Shimada Y, Eto Y, Ida H, Hachimura S, Kobayashi H. Oral administration of recombinant human acid α -glucosidase reduces specific antibody formation against enzyme in mouse. *Mol Genet Metab* 2011; 103(1): 98-100.
- 2) Yokoi T, Kobayashi H, Shimada Y, Eto Y, Ishige N, Kitagawa T, Otsu M, Nakauchi H, Ida H, Ohashi T. Minimum requirement of donor cells to reduce the glycolipid storage following bone marrow transplantation in a murine model of Fabry disease. *J Gene Med* 2011; 13(5): 262-8.
- 3) Ono E, Ozawa A, Matoba K, Motoki T, Tajima A, Miyata I, Ito J¹⁾, Inoshita N¹⁾, Yamada S¹⁾ (¹Toranomon Hospital), Ida H. Diagnostic usefulness of 3 tesla MRI of the brain for Cushing's disease in a child. *Clinical Pediatric Endocrinology* 2011; 20(4): 89-93.
- 4) Kobayashi H, Shimada Y, Ikegami M, Kawai T, Sakurai K, Urashima T, Ijima M, Fujiwara M, Kaneshiro E, Ohashi T, Eto Y, Ishigaki K, Osawa M, Kyosen SO, Ida H. Pathology of the first autopsy case diagnosed as mucopolysaccharidosis type III α/β suggesting autophagic dysfunction. *Mol Genet Metab* 2011; 102(2): 170-5.
- 5) Kikuchi K, Hamano S, Oritsu T, Koichihara R, Tanaka M, Minamitani M, Ida H. Effectiveness and safety of non-intravenous high-dose Phenobarbital therapy for intractable epilepsy during childhood. *Brain Dev* 2011; 33(5): 379-83.
- 6) Higurashi N, Hamano S, Oritsu T, Minamitani M, Sasaki M, Ida H. Iomazenil hyperfixation in single photon emission computed tomography study of malformations of cortical development during infancy. *Eur J Paediatr Neurol* 2011; 15(4): 372-5.
- 7) Higurashi N, Shi X, Yasumoto S, Oguni H, Sakauchi M, Itomi K, Miyamoto A, Shiraiishi H, Kato T, Makita

- Y, Hirose S. PCDH19 mutation in Japanese females with epilepsy. *Epilepsy Res* 2012; 99(1-2): 28-37.
- 8) 浜野晋一郎, 菊池健二郎, 田中 学, 菅谷ことこ, 松浦隆樹, 中島絵梨花, 南谷幹之, 平田佑子, 井田博幸. 小児てんかんにおけるラモトリギンの有効性と安全性. *日小児会誌* 2011; 115(8): 1294-300.
- 9) Iikura K, Katsunuma T, Saika S, Saito S, Ichinohe S, Ida H, Saito H, Matsumoto K. Peripheral blood mononuclear cells from patients with bronchial asthma show impaired innate immune responses to rhinovirus in vitro. *Int Arch Allergy Immunol* 2011; 155 (Suppl. 1): 27-33.
- 10) Katsunuma T, Matsui T, Iwata T, Nambu M, Kon-do N. Hospitalizations associated with pandemic influenza A (H1N1) 2009 in asthmatic children in Japan. *Allergol Int* 2012; 6(1): 75-82.
- 11) 横井健太郎, 秋山政晴, 山岡正慶, 横川裕一, 湯坐有希, 大橋伸介, 桑島成央, 芦塚修一, 吉澤稔治, 井田博幸. 治療選択に苦慮した神経芽細胞腫 stage 4S の2例. *小児がん* 2011; 48: 330-3.
- 12) 横井健太郎, 秋山政晴, 山岡正慶, 横川裕一, 高峰文江, 藤原優子, 宮田市郎, 井田博幸. 体重減少を主訴に鞍上部胚細胞腫が発見されたダウン症の1例. *小児がん* 2011; 48: 315-8.
- 13) Kato Y, Kamitamari A, Tajima A, Tamaki H, Itoh F, Hoshi Y, Kaneko T, Ida H. Challenges in the management of an infant with severe hemophilia A and intracranial hemorrhage. *日小児血液会誌* 2011; 25(3): 130-4.
- 14) Kato Y, Akiyama M, Itoh F, Ida H. A study investigating the need and impact of pediatric palliative care education on undergraduate medical students in Japan. *J Palliat Med* 2011; 14(5): 560-2.
- 15) Akiyama M, Kawano T, Terao-Mikami Y, Ohta-Agawa M, Yamada O, Ida H, Yamada H. Erythropoietin activates telomerase through transcriptional and posttranscriptional regulation in human erythroleukemic JAS-REN-A cells. *Leukemia Res* 2011; 35(3): 416-8.
- 16) Kawai T, Kusakabe H, Seki A, Kobayashi S, Onodera M. Osteomyelitis due to Trimethoprim/Sulfamethoxazole-resistant *Edwardsiella tarda* infection in a patient with X-linked chronic granulomatous disease. *Infection* 2011; 39(2): 171-3.
- 17) 山田哲史, 宿谷明紀, 小俣貴嗣, 田知本寛, 海老澤元宏, 井田博幸. 2次救急病院における生後12ヶ月未満児の有熱性尿路感染症の現状について. *小児診療* 2012; 75(3): 497-502.
- 18) 菅野啓一, 菅原大輔, 日根幸太郎, 新井知佳, 井上健, 福田聡子, 川畑 建, 宮林 寛, 清水正樹. NICUにて経験したノロウイルスによる Pseudo outbreak の一例とその対応について. *埼玉小児医療センター医誌* 2011; 26(1-2): 81-5.
- 19) Akiyama N. Bimodal effects of obesity ratio on disease duration of respiratory syncytial virus infection in children. *Allergol Int* 2011; 60(3): 305-8.
- 20) Ikemoto S, Sakurai K, Saito Y, Miyata I, Katsumata N, Ida H. A case of allgrove syndrome with a novel IVS7+1G>A mutation in the AAAS gene. *Clin Pediatr Endocrinol* 2012; 21(1): 11-3.

II. 総 説

- 1) 井田博幸. 第1章: 総論 D. ライソゾーム病の治療 5. 酵素補充療法 (ERT). 衛藤義勝責任編集, 井田博幸, 遠藤文夫 (熊本大学), 大橋十也, 奥山虎之 (国立成育医療センター), 櫻庭 均 (明治薬科大学), 鈴木康之 (岐阜大学) 編. ライソゾーム病: 最新の病態, 診断, 治療の進歩. 東京: 診断と治療社, 2011. p.101-6.
- 2) 大橋十也. 【全面改訂版 必携! けいれん, 意識障害 その時どうする】けいれん・意識障害を起こす疾患の治療管理のポイント 尿素サイクル異常症. *小児内科* 2011; 43(3): 592-4.
- 3) 宮田市郎. 【子どもの臨床検査 症候から診断・治療へ】症候からみる臨床検査の進めかた 体重増加不良, やせ. *小児診療* 2011; 74(増刊): 2-9.
- 4) 小林博司. 第1章: 総論 D. ライソゾーム病の治療 2. 対症療法 (薬物, その他). 衛藤義勝責任編集, 井田博幸, 遠藤文夫 (熊本大学), 大橋十也, 奥山虎之 (国立成育医療センター), 櫻庭 均 (明治薬科大学), 鈴木康之 (岐阜大学) 編. ライソゾーム病: 最新の病態, 診断, 治療の進歩. 東京: 診断と治療社, 2011. p.85-8.
- 5) 菊池健二郎, 浜野晋一郎. 【全面改訂版 必携! けいれん, 意識障害 その時どうする】けいれん・意識障害を起こす疾患の治療管理のポイント HHV-6, HHV-7による脳症. *小児内科* 2011; 43(3): 498-500.
- 6) 和田靖之. 【クローズアップ 小児リウマチ・膠原病】<小児リウマチ・膠原病に対する治療薬の適応と副作用> 非ステロイド系抗炎症薬. *小児内科* 2012; 44(1): 95-8.
- 7) 齋藤義弘. V. 各論 B. ウイルス感染症 1) 麻疹. 岡部信彦編 (国立感染症研究所) 編. *小児感染症学*. 改訂第2版. 東京: 診断と治療社, 2011. p.308-13.
- 8) 平野大志, 藤永周一郎. 【輸液 Q&A】HCO₃⁻の補正係数はなぜ本によって0.2~0.5と異なるのですか? *小児内科* 2011; 43(4): 677-9.
- 9) 小川 潔. 14. 循環器疾患 うっ血性心不全. 大関

武彦 (浜松医科大学), 古川 漸 (山口大学), 横田俊一郎 (横田小児科医院), 水口 雅 (東京大学) 総編集. 今日の小児治療指針. 第15版. 東京: 医学書院, 2012. p.464-5.

- 10) 星野健司. 【循環器の画像診断】小児循環器におけるカテーテル治療. 日小児放線会誌 2011; 27(2): 128-38.
- 11) 加藤陽子. 【がん病変の治療とともに進む緩和ケア】小児がん患者へのがん治療と緩和ケアの連携. がん患者と対症 2011; 22(2): 105-10.

Ⅲ. 学会発表

- 1) Motoki T, Miyata I, Ida H, Yoshimura M, Tojo K. Expression of CRH-related peptides in the brain and heart of model rats with left ventricular heart failure. ENDO 2011. Boston, June.
- 2) Kobayashi H, Ariga M, Shimada Y, Iizuka A, Yokoi T, Fukuda T, Iwamoto T, Eto Y, Ida H, Ohashi T. Lentiviral mediated neonatal gene therapy for Krabbe disease model mouse. American Society of Gene & Cell Therapy 14th Annual Meeting. Seattle, May.
- 3) Yokoi T, Kobayashi H, Shimada Y, Eto Y, Ishige N, Kitagawa T, Otsu M, Nakauchi H, Ida H, Ohashi T. Chimerism of bone marrow reduces the glycolipid storage in Fabry disease mice. American Society of Gene & Cell Therapy 14th Annual Meeting. Seattle, May.
- 4) Ariga M, Kobayashi H, Iizuka S, Kaneshiro E, Shimizu H, Eto Y, Ida H, Ohashi T. Long term enzyme activities and gene expression in neonatal lentiviral gene therapy of MPS VII mice. Japan Society of Gene Therapy 17th Annual Meeting. Fukuoka, July.
- 5) Kikuchi K, Hamano S, Sugaya K, Matsura R, Tanaka M, Minamitani M, Kawai K, Ida H. Effectiveness of total corpus callosotomy in the patient with subcortical band heterotopia, 14th Annual Meeting of the Infantile Seizure Society. Tokyo, Feb.
- 6) 栗原まな. (モーニングセミナー1: 小児神経科医が知っておくべき脳外傷の合併症-てんかん・高次脳機能障害・下垂体機能低下症への対応-) 脳外傷後のてんかん・高次脳機能障害. 第53回日本小児神経学会総会. 横浜, 5月.
- 7) 浜野晋一郎. (ランチョンセミナー4) 小児てんかんの特徴とその治療-発達とキャリアオーバーの観点から. 第52回日本神経学会学術大会. 名古屋, 5月.
- 8) 菊池健二郎. (教育セミナーES5) 小児のてんかん重積およびけいれん重積の治療戦略. 第114回日本小児科学会学術集会. 東京, 8月.
- 9) 松浦隆樹, 浜野晋一郎, 菅谷ことこ, 中島絵里花, 田中 学, 菊池健二郎, 南谷幹之, 井田博幸. West症候群に対するγグロブリン療法の有効性と髄液所見. 第53回日本小児神経学会総会. 横浜, 5月.
- 10) 加藤陽子, 伊藤文之, 秋山政晴, 井上大輔, 井田博幸. 当科における医学部5年生に対する小児緩和医療に関する教育への取り組み(第2報)-小児緩和医療に関するクルズスの有用性の評価-. 第16回日本緩和医療学会学術大会. 札幌, 7月.
- 11) 秋山政晴, 山岡正慶, 寺尾陽子, 横井健太郎, 湯室有希, 加藤陽子, 柳澤隆昭, 井田博幸, 金子明博, 鈴木茂伸. 網膜芽細胞腫に対する初期全身化学療法としてのVEC療法の治療成績. 第53回日本小児血液・がん学会学術集会. 前橋, 11月.
- 12) 山岡正慶, 横川裕一, 寺尾陽子, 横井健太郎, 秋山政晴, 加藤陽子, 井田博幸. 集学的治療を行った上顎洞原発ユーイング肉腫の1例. 第53回日本小児血液・がん学会学術集会. 前橋, 11月.
- 13) 和田靖之. 末梢血リンパ球感受性試験により免疫抑制剤の副反応を予測しえた小児期発症SLEの一例. 第55回日本リウマチ学会総会・学術集会. 神戸, 7月.
- 14) 南波広行, 保科定頼, 和田靖之, 久保政勝, 井田博幸. マルチプレックスPCRを用いた小児炎症性疾患における細菌遺伝子検出の試み. 第114回日本小児科学会学術集会. 東京, 8月.
- 15) 河合利尚, 村山静子, 新井勝大, 小崎里華, 奥山虎之, 小野寺雅史. 慢性肉芽腫症における非感染性炎症疾患の検討. 第114回日本小児科学会学術集会. 東京, 8月.
- 16) 田村英一郎, 村山静子, 伊藤玲子, 河合利尚, 井田博幸. X連鎖慢性肉芽腫症における腸内細菌叢の検討. 第43回日本小児感染症学会総会・学術集会. 岡山, 10月.
- 17) 村山静子, 明城和子, 竹澤祐介, 石黒 精, 河合利尚, 大石 勉, 井田博幸. マクロファージ活性化症候群を発症した慢性肉芽腫症の3例. 第43回日本小児感染症学会総会・学術集会. 岡山, 10月.
- 18) Hirano D, Fujinaga S, Endo A, Watanabe T, Syukuya A, Ida H. Does low-dose intravenous pulse methylprednisolone therapy produce unacceptable side effects? 11th Asian Congress of Pediatric Nephrology 2011. Fukuoka, June.
- 19) Yamada A, Shukuya A, Saito M, Iijima M, Tajima A, Yoshinari S, Tachimoto H, Miyata I, Ebisawa M, Ida H. The importance of follow-up study to make a diagnosis of dRTA -Two case reports-. 11th Asian Congress of Pediatric Nephrology 2011. Fukuoka, June.
- 20) Urashima T, Ogawa K, Kawachi S, Ito R, Fujiwara M, Eto Y, Ida H. Telmisartan improves RV function

via anti-fibrotic effects in PA banded rat. Pediatric Academic Society Annual Meeting, Boston, Feb.

- 21) 伊藤伶司. ファロー四徴症に対するβ遮断薬と低血糖発作に関する検討. 第47回日本小児循環器学会総会・学術集会. 博多, 7月.

IV. 著 書

- 1) 井田博幸. 第七章：内分泌・代謝 マロトー・ラミー症候群. 井村裕夫(京都大学)総編集, 福井次矢(聖路加国際病院), 辻 省次(東京大学)編. 症候群ハンドブック. 東京：中山書店, 2011. p.388-9.
- 2) 大橋十也, 有賀賢典. 第七章：内分泌・代謝 スライ症候群. 井村裕夫(京都大学)総編集, 福井次矢(聖路加国際病院), 辻 省次(東京大学)編. 症候群ハンドブック. 東京：中山書店, 2011. p.390-1.
- 3) 黒澤健司. 基礎編 2. 遺伝医学的判断と情報提供 2) 確定診断とその進め方. 福嶋義光(信州大学)編. 遺伝カウンセリングハンドブック：遺伝子医学MOOK 別冊. 大阪：メディカルドウ, 2011. p.58-9.
- 4) 栗原まな. 小児の高次脳機能障害リハビリテーション実践ガイド：写真と症例でわかる. 東京：診断と治療社, 2011.
- 5) 加藤陽子. 総論 IV章：支持療法～緊急対応から晩期合併症対策まで～ 6. 小児がん疼痛管理：検査・処置時の鎮静・鎮痛, 疾病による痛みの除痛. 堀部敬三(名古屋医療センター)編. 小児がん診療ハンドブック：実地診療に役立つ診断・治療の理念と実践. 大阪：医薬ジャーナル社, 2011. p.297-304.

皮膚科学講座

教授：中川 秀己	アトピー性皮膚炎, 乾癬, 色素異常症
教授：上出 良一 (定員外)	光線過敏症, アトピー性皮膚炎, 皮膚悪性腫瘍
教授：本田まりこ (定員外)	皮膚ウイルス感染症(ヘルペスウイルス, ヒト乳頭腫ウイルス), 性感染症
准教授：石地 尚興	皮膚リンパ腫, ヒト乳頭腫ウイルス感染症, 皮膚アレルギー学
准教授：太田 有史	神経線維腫症
准教授：佐伯 秀久	アトピー性皮膚炎, 乾癬
准教授：川瀬 正昭	ヒト乳頭腫ウイルス感染症
講師：伊藤 寿啓	乾癬, 光線療法
講師：梅澤 慶紀	乾癬
講師：松尾 光馬	ヘルペスウイルス感染症

教育・研究概要

I. 乾 癬

乾癬の治療はステロイド外用剤と活性型ビタミンD₃製剤を用いた外用療法は治療の基本となる。内服療法としてシクロスポリンMEPC, エトレチネートがあり, さらにスキンケア外来では全身照射型のNarrow-band UVB, 308nm excimer lampを設置し, 現在, 積極的に光線療法を行っている。また, 治療の選択肢は増えてきており, 2010年1月から生物学的製剤である完全ヒト型化およびキメラ型のTNF-α抗体のアダリムマブ, インフリキシマブが認可され, 難治性乾癬患者への使用が開始された。また, 2011年3月には新たな生物製剤である完全ヒト型化のIL-12/23 p40抗体のウスチキヌマブが認可され, 難治性乾癬患者の治療の選択肢がさらに増えた。治療法の選択には疾患の重症度に加え, 患者のQOLの障害度, 治療満足度を考慮することが重要である。そのために我々が作成した乾癬特異的QOLの評価尺度であるPsoriasis Disability Indexの日本語版を応用し, 患者QOLの向上に役立てている。また, 乾癬患者に多いとされるメタボリック症候群に対しても精査を行い, 高血圧, 高脂血症の治療も合わせて行っている。また, 効果の高いと考えられる生物学的製剤である抗IL-17抗体や抗IL-23 p19抗体の臨床試験を実施している。